

みたか太陽系ウォーク実行委員会  
(東京都三鷹市)

# 「みたか太陽系ウォーク」による 科学文化の普及

みたか太陽系ウォーク  
実行委員会

実行委員長

あがた ひでひこ  
縣 秀彦



## 1. 三鷹市の概要

三鷹市は、東京都心から西へ約18キロメートル、東京都のほぼ中央に位置する良好な住宅都市で、東は杉並区、世田谷区の2区に、西は小金井市、南は調布市、北は武蔵野市にそれぞれ接しています。都心への通勤利便性や、井の頭恩賜公園、玉川上水、神田川などの樹林や水辺に残る緑豊かな風景が人気を集め、民間の調査でも住みたい街の上位に度々ランクインしています。2019年10月現在の人口は18万8千人余で、主に社会増による人口の増加が続いています。



井の頭恩賜公園

市内には、大正時代に都心から移転してきた国立天文台(旧東京天文台)の本部が立地し、天文学を中心とした自然科学の普及啓発の拠点となっています。また、山本有三、武者小路実篤、三木露風、太宰治、吉村昭など、多くの作家や詩人たちが住んだ文学の薫り高きまちとして知られるほか、三鷹の森ジブリ美術館(三鷹市立アニメーション美術館)は世界中から年間60万人を超す観光客を受け入れています。



三鷹の森ジブリ美術館  
(三鷹市立アニメーション美術館)

一方で、三鷹市は、全国に先駆けて下水道整備、コミュニティ行政の推進などの行政課題に取り組んできました。行政の計画づくり等の場面では「市民参加」を進め、市民の皆様と行政とが、それぞれの役割と責務を果たす対等な「パートナー」として「協働のまちづくり」を進めており、2008年に日本経済新聞社等が実施した「行政革新度調査」「行政サービス水準調査」の両調査で全国1位と高く評価されています。

## 2. 活動開始の背景・経緯

国立天文台の本部が立地する三鷹市において、2009年の“世界天文年”の機運醸成事業として、広く市民の自然科学への興味関心を高めるとともに、まちの魅力を再発見してもらうための機会として、「三鷹の森科学文化祭」の中心的な取組であるまちぐるみのスタンプラリー「みたか太陽系ウォークスタンプラリー」を開始しました。

活動にあたっては、三鷹市と国立天文台の包括的な連携協定に基づき、開始当初より国立天文台の積極的な支援のもと、趣旨に賛同していただいた地域の商店会等の協力を得ながら2019年まで11年にわたって継続実施しており、三鷹の秋の風物詩として定着しています。

## 3. 活動の広がり

2009年の開始当初、50か所で開始したスタンプラリーが、2019年は約250か所に設置するまで拡大しています。また、会期に合わせて天文学に関する市民向け講座の実施や、星に関する情報の普及に取組“星のソムリエみたか”と協力した街中での観望会の開催など、より深く天文学に触れる機会も提供しています。さらに、スタンプ設置協力事業者の店頭などで、自慢の料理や飲み物とともに、天文学の専門家と語り合う

「まちなかサイエンスカフェ」など関連事業も展開しており、まちと科学の魅力をまとめて味わえるイベントを実施しています。

また、多くの人が行き交うJR三鷹駅の駅ビル「アトレヴィオ三鷹」協力のもと、駅コンコース等に太陽系をイメージさせる装飾を施し、周知に努めています。



JR三鷹駅構内の太陽オブジェ

## 4. 継続性

2009年より2019年まで11年にわたり実施しています。8年目の2016年には、天文学を普及する目的、継続年数や参加者数、参加店舗・事業所数の多さから、国際天文学連合(IAU)でも大変ユニークな取り組みであるとして紹介されるなど、世界的にも類を見ない科学イベントとして長期にわたって継続しています。

また、参加者のアンケート結果によると、「来年も参加したい」という声が多く寄せられています。



商店の店頭での様子

## 5. 地域資源の活用

本事業は三鷹市に本部を構える国立天文台及び三鷹市、NPO法人三鷹ネットワーク大学推進機構の3団体が共催しています。また、市内を中

心に2019年実績で11事業者・団体が協賛しています。

こうした、官民の垣根を越えた強固な連携体制のもと、店舗や事業所、公共施設など約250か所へのスタンプ設置、マップ(20,000部)の配布、市民サポーターの参加等により、最終的に3,500人以上が賞品交換に訪れる人気のイベントとなっています。



イベントでの出展の様子



市民サポーターによる活動の様子

## 6. 創意工夫

イベントのコンセプトは、JR三鷹駅を中心(=太陽)に、13億分の1に縮小した太陽系を市域全体に重ねてその大きさや距離を実感しよう、という体感型の科学イベントです。

非常に多くのスタンプを設置している一方で、スタンプ数を競うだけの単調なスタンプラリーとならないよう、エリアの名称やマップの構成、賞品等の設計に際しては一貫して科学、天文学の視点を盛り込んでいます。

また、会期の前後も含めて様々な関連イベントを開催したり、スタンプ設置事業者の協力のもと関連商品の開発・販売やお店オリジナルの特典を付けていただくなど、スタンプラリーを共通項にもつ市民同士が有機的な交流をもてる機会を多く設定し、個々人が黙々と集めて回る無機質なスタンプラリーにならないよう、差別化に取り組んでいます。



### 参加店舗がさまざまな

#### コラボレーション商品を開発し販売

そのほか、JR三鷹駅構内への太陽の大型模型の設置、スマートフォンを活用したデジタルスタンプラリー「さんぽき」やみたか都市観光協会のNPO法人発足10周年記念のデジタルスタンプラリー「お宝発見!ミタカをミタカ」との同時開催など、その時々様々な事業と連動し、相互に参加者が増加する好循環を生み出しています。



さまざまなメディアと  
タイアップしてイベントを紹介  
(例:リビングむさしの2018.9.29号)

## 7. 成果

10年以上にわたる継続により、“天文台のあるまち三鷹”のアイデンティティが浸透しており、秋口に台風が頻発した一部の年ではイベントの中止などの影響を受けたものの、2018年までの10年間を通じて見れば参加者や実際に押されたスタンプの数、賞品交換数等は増加トレンドが継続しています。

参加者アンケートの満足度も高く(2018年:92.9%)、三鷹の秋の定番イベントとしても市民の間に定着しており、スタンプ設置協力事業者にとっても新規顧客との接点になり得ることから、近年ではスタンプを設置したいと店側から打診される例もあります。

また、こうした天文学の普及活動から興味をもつ親子連れが増加しており、国立天文台の定例観望会などは、近年、告知直後から申し込みが集中し予定数いっぱい状態が続くなど、科学のすそ野を広げる効果が出ています。

## 8. 課題と展望

市民の中での認知度は非常に高く、実際に多くの方が参加しており基本的な運営は軌道に乗っています。しかし、参加者が増えるにつれて、科学の普及啓発という本題とは別に、一部の参加者の間でいかに早くスタンプを集めるか、といった競争意識が生まれ過熱気味になった時期もあったことから、多くの参加者の楽しみを損なうことなく本来の趣旨に立ち返り、科学の普及とまちの魅力を知ってもらうための仕掛けづくりには継続的な工夫が必要です。



地域の店舗と連携したイベント等も開催しまちの魅力を体感できるよう企画

また、現状では紙のマップを持ち歩いてスタンプを集める形式を継続していますが、スマートフォンの普及や位置情報の利活用、VR/AR等の先端技術が急速に一般化しつつある状況を鑑み、デジタル技術を活用してまちの魅力をより一層伝えられるイベントへと進化していく必要があります。

そのためには、従来以上にイベントの魅力を引き出し、多様な事業者や団体との連携により計画的に資金を調達してシステム投資を進めるなど、次の10年を見据えた取組に着手したいと考えています。



三鷹市内全戸に告知している  
「広報みたか」